

## 「互いへの配慮と赦し」

ルカによる福音書 17 章 1～6 節

2020 年 3 月 29 日 朝拝

### 序：この箇所の位置づけ、テーマ

ルカによる福音書の 17 章 1～10 節にはイエス様が弟子たちに語られたことが記されています。新共同訳聖書の小見出しには三つのテーマが挙げられています。「赦し、信仰、奉仕」です。もう少し細かく見ると 4 つのテーマがあることが分かります。1～2 節が「つまずき」について、3～4 節が「罪を犯した兄弟を赦すこと」について、5～6 節が「信仰」について、7～10 節が「奉仕」についてです。今朝はその中の 1～6 節を学びたいと思います。一見バラバラなテーマのように思えますが、丁寧に見ていくと実はつながっていることが分かります。

まず 17 章 1～4 節は、「つまずき」と「罪を赦すこと」について語られていますが、「つまずき」とは「罪に陥れる」という意味があるので、どちらも「罪」に関わっているということが分かります。

### I. 小さな者の一人をつまずかせることへの警告 (17:1～2)

まず「つまずき」という言葉ですが、もともとは「動物を捕らえる罠」や「道に置かれた障害物」を意味する言葉です。そこから「つまずきの原因、人をつまずかせて罪に陥れる原因、信仰の挫折を引き起こすもの」という意味が出てきます。

そしてイエス様はまず「つまずきは避けられない」とおっしゃっています。この翻訳では「つまずきが起こってしまうのは仕方ない」というニュアンスに聞こえるかもしれませんが、しかし原文では「つまずきの原因が来ない（もたらされない）ということはありません、不可能だ」という言葉となっています。つまずきの原因となるもの、信仰を阻害するもの、罪に誘惑するものは必ずやってくる。それ自体を防ぐことはできない。それが現実だということです。

ではイエス様は「つまずきが起こることはしょうがない。そういうものだ」とおっしゃっているのかというと、そうではありません。むしろイエス様はそのすぐ後で「だが、それをもたらす者は不幸だ、災いだ」と嘆いておられるのです。確かにつまずきの原因が生じること自体は避けられないが、それをもたらす者、つまずきの原因を作る人は災いだ、不幸だ、と言っておられるのです。

そして 17 章 2 節では「そのような者は、これらの小さい者の一人をつまずかせるよりも、首にひき臼を懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がましである」と言われています。「ましである」というのは「その人にとってましである、得である」という意味です。これらの小さい者の一人をつまずかせるくらいなら、首にひき臼の石を巻き付けられて、深い海に投げ込まれる方が、その人にとってまだましである。それほどに「これらの小さい者の一人をつまずかせる」ということは重大な罪であり、重い罰をもたらすということです。それゆえ 17 章 3 節では「あなたがたも気をつけなさい」と警告されています。これは「自分自身に注意しなさい、気を付けなさい」という言葉です。すなわち自分が「これらの小さい者の一人」をつまずかせてしまわないように注意しなさい、気を付けなさい、ということです。

では「これらの小さい者」とは誰のことでしょうか。「これらの」と言われているので、その場でイエス様が語りかけている「弟子たち」のことだと思われまゝ。その中でも特に「小さい者」と言われていま

す。ある人は「子ども」のことだと考えます。しかしおそらくそれだけではなく、「小さい者」とは「弱い者、未熟な者、つまずきやすい者」という意味合いがあると思われます。イエス様はそういう小さい者、弱い者の一人でもつまずかせるなら、「首にひき臼を懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がましである」と言われるのです。それ程にそれは重い罰をもたらす重大な罪だということです。

しかしなぜなのでしょう。それはイエス様を信じる「小さな者の一人」が、それほどイエス様にとって、神様にとって高価で大切な存在だからです。決してつまずかせてはならない、失われてはならない存在なのです。それゆえに、それらの者の一人でもつまずかせ、信仰の挫折を起こさせ、罪の中へ、滅びの中へと陥れてしまうことは重大な罪なのです。

使徒パウロはローマの信徒への手紙 1 章 13 節～15 節で次のように語っています。

「従って、もう互いに裁き合わないようにしましょう。むしろ、つまずきとなるものや、妨げとなるものを、兄弟の前に置かないように決心しなさい。それ自体で汚れたものは何もないと、わたしは主イエスによって知り、そして確信しています。汚れたものだと思うならば、それは、その人にだけ汚れたものです。あなたの食べ物について兄弟が心を痛めるならば、あなたはもはや愛に従って歩んでいません。食べ物のことで兄弟を滅ぼしてはなりません。キリストはその兄弟のために死んでくださったのです。」

今日の教会においても、残念なことですが、私たちの言動が、しかも自分にとっては何気ない言動が人をつまずかせてしまうということは起こり得ます。そしてその人が教会から、信仰から離れてしまう。これは本当に悲しいことです。

しかし時として、つまずいた人を責めるということも起こりかねないと思います。「そんなことでつまずくのはおかしい。そんなことでつまずく方が悪い」と。しかしイエス様は決してつまずいた人、つまずいてしまいやすい小さな者、弱い者を責めてはおられません。あくまでつまずかせる者、つまずきの原因をもたらす者を責めておられる。その責任を厳しく追及しておられるのです。ですから私たちも、自分自身が兄弟姉妹の前につまずきとなるものを置かないよう配慮し、注意している必要があります。

## II. 一日7回罪を犯されても、悔い改めるなら赦しなさい (17:3-4)

このように、1～2 節では兄弟をつまずかせないように、罪に陥らせないように、ということが語られてきましたが、3～4 節では実際に兄弟が罪に陥ったら、罪を犯したなら、どうすればよいかが教えられています。3 節「もし兄弟が罪を犯したら、戒めなさい。そして、悔い改めれば、赦してやりなさい」。まず「もし兄弟が罪を犯したら、戒めなさい」と言われています。レビ記 19 章 17～18 節には次のようになります。

「心の中で兄弟を憎んではならない。同胞を率直に戒めなさい。そうすれば彼の罪を負うことはない。復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である。」

自分に罪を犯した兄弟を心の中で憎み、恨み続けてはならない。そうではなく、その同胞（兄弟）を率直に戒めるように、と言われています。そしてそれが隣人を自分のように愛することにつながっています。イエス様も同じように罪を犯した兄弟を戒めるよう教えています。そしてそれだけではなく、「悔い改めれば、赦してやりなさい」とも言われています。相手が悔い改めたのに、いつまでもその相手を非難し続ける、責め続ける、恨みを抱き続けるのはいけません。戒めて、その相手が悔い改め、「ごめんなさ

い」と謝るなら、赦してあげなさい、と言われるのです。遑って考えれば、罪を犯した人を戒める時にも、赦す用意をもって、柔和な心、愛の心をもって戒めるということです（ガラテヤ 6:1）。私たちはついカッとなって、怒りにまかせて相手を非難する、またし続けるということをしてしまいがちかもしれませんが、それはよくないことなのです。

さらにイエス様はこの「赦す」ということについて、さらに4節でこう語っておられます。

「一日に七回あなたに対して罪を犯しても、七回、『悔い改めます』と言ってあなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」

同じような言葉がマタイ福音書 18章22節にも記されていますが、そこではイエス様がペトロに「7回どころか7の70倍までも赦しなさい」とおっしゃっています。数だけ見ればマタイの方が圧倒的に多いことがわかります。しかしルカの方にのみ記されている言葉があります。それは「一日に」という言葉です。「一日に7回」同じ相手から罪を犯されるということはあまりないことでしょうか。この7という数字は完全数ですから、文字通り7回までは赦して、8回目は赦さなくてよいということではありません。しかし想像してみると1日に7回というのはすごいことです。一日は24時間ですが、起きている時間は十何時間でしょう。そうすると一日に7回というのは、2時間ごとに罪を犯すということになります。悔い改めて、赦してあげたと思ったら、また2時間後に罪を犯す。1回、2回は我慢できても、3回、4回、5回となると「いい加減にしろ」、「全然反省していないではないか」となるのではないのでしょうか。そして「そんな口先だけの悔い改め、謝罪では赦さない。本当に悔い改めるまで、その人の態度や生き方が変わるまでは赦さない」ということにもなるでしょう。しかしイエス様は「たとえ一日に七回あなたに対して罪を犯しても、七回、『悔い改めます』と言ってあなたのところに来るなら、赦してやりなさい」と言われるのです。

私たちはこれを聞いてどう思うのでしょうか。そんなことはとてもできない、と多くの人は思うのではないのでしょうか。「1回、2回赦すのも難しいのに、1日7回も同じ相手を赦し続けるなんて…」と。おそらくこのイエス様の教えを聞いた弟子たちも同じように思ったのではないのでしょうか。だから、続く17章5節では弟子たち、特にその中から選ばれた使徒たちが次のように言うのです。

### Ⅲ. からし種のような信仰でも、不可能は可能になる！（17:5～6）

「わたしどもの信仰を増してください」と。このように使徒たちが言った気持ちは、私たちにもよく分かるのではないのでしょうか。1日に7回も自分に罪を犯した相手を赦せと言うが、自分の今の信仰ではとても無理だと使徒たちは思ったのでしょう。またその前に言われていた「小さな者の一人でもつまずかせてならない」というイエス様の教えについても、今の信仰のままではできない、と思ったかもしれません。だから主であるイエス様に「私たちに信仰を増し加えてください」と願ったのです。そうして信仰が強められれば、そういうこともできるようになるかもしれない、と。

しかしイエス様はこのような使徒たちの願いにどう答えられたのでしょうか。「よろしい。わたしがあなた方の信仰を増し加えてあげよう、強めてあげよう」と言われたのでしょうか。そうではありませんでした。むしろ次のように言われたのです。17章6節

「主は言われた。「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう。」

「からし種」とはごく小さな種です。一方、「桑の木」は地中にしっかり根を張った木と考えられていました。その桑の木が根こそぎに抜かれ、海の中に根を下ろすということは普通に考えれば不可能なことです。しかしイエス様は、からし種のようなごく小さな信仰さえあれば、その不可能に思えることが可能となる、と言われたのです。もちろん「桑の木が抜け出して、海に根を下ろす」というのは誇張的な表現であり、イエス様はそのことを文字通り弟子たちにするよう命じられたわけではありません。

使徒たちは、小さな者の一人をつまずかせない、あるいは一日に7回兄弟を赦すというようなことは、自分たちにもっと大きな信仰がなければできない、不可能だ、と考えていました。しかしイエス様はそうではなく、たとえ「からし種一粒のような信仰」でもあるなら、それはできる、可能となる、と言われたのです。

しかしなぜでしょうか。なぜそれほど小さな信仰でも、そんなに大きなことができるかとイエス様は言われるのでしょうか。ある人は信仰を電線にたとえます。電線そのものは細いものです。しかしそれが電源につながっていれば、電線を通して大きな電気、電流がもたらされます。信仰も同じように、たとえそれ自体は小さなもの、頼りないものであったとしても、それが神様につながっているのなら、その信仰を通して神様の大きな力が働くのです。信仰とは自分の力ではなく、自分の信仰でもなく、ただ神様の力に寄り頼むことです。そのような神様につながっている信仰が、たとえからし種一粒ほどでもあるならば、その小さな信仰を通して神様の偉大な力が働き、不可能に思えることも可能となる。そのことをイエス様は教えておられるのです。

#### **結論：**

イエス様がここで命じておられること、すなわちイエス様を信じる小さな者を一人もつまずかせないこと、また一日7回も自分に罪を犯す者を赦し続けることは、私たちにとって難しく思えます。自分のような信仰ではとてもできない、と思えるかもしれません。たしかに自分の力ではできないでしょう。しかし、からし種一粒の信仰さえあれば、私たちの考えをはるかに超える神様の力によって不可能は可能となるのです。それがイエス様の約束です。ですから私たちは最初から自分にはできないと諦めてしまうのではなく、神様に寄り頼む信仰をもって、それを実行していきたいと思えます。

#### **祈り**

私たちの力と想像をはるかに超える力を持っておられる全能の父なる神様。御名をほめたたえます。イエス様が命じておられるように、小さな者の一人でもつまずかせないこと、一日に7回罪を犯されたとしても赦し続けることは、私たちにはとても難しく、不可能なことにさえ思えます。しかし主よ、あなたは「からし種一粒のような信仰」でも、それはできる、神の力によってそれは可能となると約束してくださいました。どうぞ私たちがそのあなたの言葉に励まされながら、主イエスの教えに、その愛の戒めに従っていくことができますように。そのためにあなたの力と導きを豊かにお与えください。主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。